

クリリングつけられ一時間クリイキ我慢するまで挿入禁止なのに連続  
アクメ&潮吹きが止まらない女の子の話。

朝日 きなこ

「先輩…もう、我慢できないよお……♡」

大好きな先輩のベッドの上で、大きく足を広げて、濡れたおまんこを晒す。  
ぷっくりと腫れて、肥大したクリトリスにはピンク色のリングがつけられて  
いる。

ふるふると震えて、刺激を求めるが、目の前のやけに美形の男はにっこりと  
微笑むだけで、欲しい刺激は与えてくれない。

「駄目だよ。まだ一時間経ってないよね。ほら、次はクリシコどれだけ耐え  
られるかな？」

「やあだあ…♡」

半年前から付き合っている一つ年上の黒川拓海先輩。成績優秀、眉目秀麗。くろかわたくみ

誰にでも優しく、先生たちからの評判も厚い。そんな先輩に告白されたときは夢かと思った。

でも、まさかあの優しい先輩があんなにエッチなんて知らなかった。付き合いだしてから、毎日のように体を触られて、おっぱいもおまんこもすっかり先輩の好みに変えられてしまった。

処女だったのに、今ではとんでもないビッチな体になっちゃった。乳首もクリトリスも大きくなって、毎日オナニーしないと過ごせない。でも、そんな体を先輩は可愛いつて褒めてくれるから、全く気にしてない。今日だって、朝からおまんこにローター二個も挿れられたまま、授業を受けた。玩具の刺

激に弱い私にとって、その命令は過酷そのものだけれど、「いくの我慢できたら、ご褒美あげる」なんて言われたら、それだけで子宮が疼いてしまった。

そして、待ちに待った放課後。私は先輩の自宅にやってきた。

彼の家は立派な一軒家だが、ご両親は仕事の関係で海外に住んでいて、先輩は一人暮らしをしている。

だから、いつもこの家でずっとエッチなことをして過ごしてるの。

「先輩：ちゃんと我慢しましたよ♡」

「ほんとかなあ。そんなエッチな体してくるくせに、一日中、おまんこローターで虐められて、イクイクしないなんておかしいと思うけど？」

「嘘じゃないです…！」

本当は、授業中に何回かイッちゃったけど。

「じゃあ、こっちおいで。おまんこ検査しようね」

「はい…♡」

椅子に座ったまま先輩が私を手招きする。歩くたびに、お股の間でぬちゅぬちゅと愛液がこすれて、声が漏れた。

「ああ、う♡んんう…ああ♡」

先輩の前まで行くと、スカートを捲る。早く触って欲しくて、腰を突き出しておねだりするが、先輩は澄まし顔で首を捻る。

「あれ、こういう時はなんて言うんだっけ？」

「んう…先輩、おまんこ検査してください♡」

「いい子だね♡」

先輩は私を褒めると、愛液で色が変わったショーツの上から、おまんこの割れ目をなぞった。

「ああア~~~~ツ♡♡」

「まだ、パンツの上から触っただけなのに、もう君の淫乱おまんこ汁で、パンツびちゃびしゃだね♡ 指先でこりこりするだけで、ぬちゅぬちゅっといういやらしい音溢れてくる♡」

「ああ♡んう…だ、だってえ、ずっとローターはいつてたからあ♡♡せんばい、もっと、もっとさわってえ♡」

「なら、自分でパンツ脱いで、その机の上でお股ぱっかーんして、トロトロおまんこ、俺に見せてごらん♡」

「はい♡」

耳元でエッチな命令を囁かれ、それだけでイきそうになるのをぐっと堪えて、先輩がいつも使っている勉強机の上に腰かけた。

そして、スカートを捲り上げ、見せつけるようにゆっくりパンツを脱ぐ。

「ああ♡んんう…♡♡」

「ふっ…まん汁溢れすぎて、糸引いてる♡ほんとにイってないの？嘘ついてたら、お仕置きだよ」

「んんッ…う、うそじゃない…♡♡」

お仕置きという言葉に無意識に腰が跳ねた。先輩のお仕置きは本当に意地悪だけど、脳がとろけちゃうくらい気持ちいい。

「こら、手止めるな。パンツ脱いだら、自分でおまんこ広げるんだよ」

「うう、ああ…はい♡♡」

足に引っかかっていたパンツを床に落として、おまんこの割れ目を広げる。

そこは、指先が滑るほど、びちよびちよに濡れていた。

「はあ、ふっ…は、んんう…♡♡」

二人きりの部屋の中に、ローターの無機質な音が大きく響く。

「ちゃんとローターは挿入ってるね。じゃあ、まずクリトリス検査から始めようか♡」

え、まだ、ローターはいったまま…ッ♡」

「当たり前だろ。ちゃんと俺の言いつけを守ったお利口おまんこってわかるまで、ローターは抜いてあげないからな♡」

「や、まっ…」

「こら、ちゃんとおまんこ広げてなさい」



「ああ♡…は、はい…♡」

「いい子だね…じゃあ、クリトリス検査始めます♡」

そう言うのと、先輩が机の前に膝立ちになり、ちょうど眼前におまんこが来る体勢になった。

指先で包皮をむくと、開発されきった淫乱クリトリスがぷるんと顔を出す。

「赤くなってるぽってり腫れた君のデカクリ、いつ見ても可愛い♡ 勃起してプルプル震えてる。ふう♡」

剥き出しになった敏感クリトリスに息を吹きかけられ、腰を仰げ反らす。

「あっああアア〜ツツ！♡♡♡やだ、ツ、だめええ♡ いっちゃうからあ♡」

「駄目だよ、勝手にイったら。いつも言ってるだろ、俺の許可なくイくのは禁止だって」

「ああ…んう、ごめんなさい…♡♡」

「じゃあ、クリ検査続けるよ♡ まず、この勃起クリをいっぱいシコシコしよ  
うね♡はい、シコシコ♡シコシコ♡」

ローターの刺激ですでに硬くなったクリトリスを、先輩が指先でつまみ、き  
ゆきゆ♡と扱き始める。

「いやああ♡も、んっ♡ああ♡だめ、クリだめえ♡きもちいい、イッチ  
やう♡イッチやうからああ〜♡♡んう、ううう♡クリシコだめえええ  
♡♡」

「気持ちいいね♡ おまんこからとろとろ、まん汁が溢れてくる♡ クリシコ  
大好きだもんねえ♡」

「ああッ！♡きもちッ♡きもちいいよおおッ！♡♡」

「こら、お股閉じちゃダメだろ。ふわとろ淫乱おまんこしっかり俺に見せて。

入口くぱくぱあつてしてるけど、ローターだけじゃ足りないの？ほんと可愛  
い。でも、だめ。今はクリトリス検査中だから、こっちに集中しようね♡は  
い、シコシコ♡シコシコ♡」

摘まみ上げ、根元から先端まで何度も何度も擦り上げる。ビリビリとした快  
感がクリトリスから全身に広がり、甲高い嬌声が溢れ出る。

「気持ちいいね♡クリどんどん大きく硬くなってるよ♡もうこんなの、女  
の子クリじゃないね♡勃起させて、俺のクリシコで気持ちよくなっちゃうこ  
れは、もうクリちんぽだよ♡シコシコ♡シコシコ♡」

「ッやああああッッ！♡♡だめ、え♡ッああ♡やらああ♡♡くりちんぽ  
だめえええッ！♡♡やあああ♡っああ♡んん♡♡」

シコシコ♡じゅッ♡じゅッ♡シコシコ♡じゅッ♡じゅッ♡

じゅ♡じゅ♡シコシコ♡じゅ♡じゅ♡シコシコ♡

私の嬌声が大きくなればなるほど、クリちんぽ扱きは激しくなり、腰がガク  
ガクと快感に震えた。

「ッひぐうううッ！♡♡ああッ♡っらめえええ！♡♡だめええ♡♡  
つよしゆぎい♡もう、いやあああ！♡♡くりちんぽいちやうよおッ  
ッ！♡♡♡」

「まだ、だめだよ」

「ッやあああッッ！♡♡だめ、え♡ッああ♡やらああ♡♡いかせて  
♡♡いかせてッッッ！♡♡」

すぐそばまで来た絶頂感に、このまま身を預けてしまいたいのに、先輩の手が止まる。

「だから、だめだって」

「…ッ、やだぁ♡♡も、むりい…ッ♡」

「そんなにイきたいの？ なら、本当のこと言おうか」

「へ、え…？」

「俺に嘘ついてるよね」

先輩の目が鋭く尖る。全て見抜かれていることを察したが、この状況でうまい言い訳なんて思いつくはずもない。

叱られるとわかっていても、諦めて口を開くしかなかった。

「ごめ、ごめんなさいッ…ほんとに、イっちゃいました…」

「ふーん…何回、いったの？」

先輩の冷たい声が、やけに鮮明に頭に響く。

怒ってる、先輩…。

私は、怯えた口調で、小さく答える。

「さ、三回くらい…」

「くらい？　へえ、回数も分かんないくらいいったんだ」

「ッ、ご、ごめんなさい…」

先輩は不機嫌な顔で私を見上げる。

穏やかな笑みが消えた先輩の顔は怖いけど、クールな表情もかっこよくて、  
思わず見惚れてしまう。

「言うこと聞けない悪い子にはお仕置きだね」

お仕置き。最初の頃は、その言葉を聞くだけで待ち受ける快樂地獄に怯えていた。でも、今は違う。これから与えられる、至福の快感が待ち遠しくて堪らない。

そんな気持ちが漏れ出ていたのか、先輩は増々不機嫌になる。

「最近、お仕置きって言っても、物欲しそうな顔するよね」

「そ、んなこと……」

「ああ、あれくらいじゃ、君みたいな淫乱にはお仕置きにならないのか」

「ちがつ……」

嫌な予感が背中を伝う。

あれ、今日の先輩はいつもと違う。いつも意地悪だけど、本当に私の嫌がることはしない。でも、今日はなんだか許してくれない気がする。

こういう悪い予感はあるものだ、この後の私は身をもって体感することになる。

「ちよつと、甘やかしすぎちゃったかな…」

「え…」

先輩はぼそつとそう呟くと、私の腕を引いて、ベッドの上に体を投げた。

「うわッ…！」

「本当のお仕置きを始めようか」

「ひっ…」



悪魔の笑みを浮かべ、私を見下ろす先輩。不気味な笑みを見て、逃げ出したくなるが、両手首と足首をM字開脚の状態で、拘束されていては、身動き一つ取ることはできない。

おまんこの中ではまだ、二つのローターがぶつかりながら、膣壁を刺激し続けている。

「はしたなくお股開いて、おまんこからまん汁とろとろ零れてるよ。拘束されて、また興奮しちゃったの？」

「ああッ、んんうゝち、ちがっゝ」

「違うことないでしょ。身動きとれない状態でおまんこ虐められるの想像して、まん汁垂れ流す、変態ちゃんだもんね」

言葉で私を攻めながら、先輩はひくつくおまんこに手を伸ばした。

軽く押されるだけで、膣口がぷちゅ♡といやらしい音を立て、指に吸いついた。

「ああアツ…!♡♡♡」

「ほら、何もしくても俺の指飲み込まれそうだけど？ ローターだけじゃ、物足りないっておまんこは言ってるよ」

「ああア…ああツ♡んう、や、だってツ…♡」

ぷちゅぷちゅ♡と水音が耳に入ると、それが興奮剤になり、余計に体の芯が熱を持つ。ぐりぐりと指先を押し付けられると、膣口が物欲しそうに疼きだす。

しかし、もう少しで入るという瞬間、先輩の指が離れていく。

「ああッ……な、なんでッ？」

「堪え性のない子にはお仕置きしないとね」

「な、なに…」

先輩が濡れた指先を舌でいやらしく舐めとる。見せつけるように、舌におまんこ汁を絡めとる光景に、おまんこの奥がぎゅうっと収縮した。

「ああ…♡」

「顔、とろとろ…♡ そんな可愛い顔されたら、すぐにでも俺のちんぽぶち込んでやりたいけど、それじゃあ、君のためにならないよね」

「へ、え…？」

不穏な物言いに、腰が引ける。そんな私を先輩は押し倒し、上に覆いかぶさってくる。

「学校でローター挿れて何度もイっちゃうような、よわよわ雑魚まんこは、

俺が一から調教してあげないと」

「やあだ…先輩、拓海せんぱい…ッ」

切なさを孕んだ声で、先輩を呼ぶと彼は眉間を寄せた。

「ッ、そんな可愛い声で呼ばれたら、我慢できないだろうが…ッ、キスだけだからな……」

「あッ……んうんんッ…♡」

唇が重なり、割れ目から肉厚な舌が差し込まれる。舌が絡み合うと、唾液が溢れ、喉に流れ込んでくる。

「んんう♡んんッ、う♡ッんん、ううう…♡」

奥歯の上を舌先が滑り、上顎をちろちろと舐められる。弱い性感帯をくすぐられ、くぐもった声が漏れる。

「んんぐう…！♡♡んんう、ツ♡んん、ううう…ツ♡」

気持ちよさに自然と腰が動くと、先輩の唇が離れていく。名残惜しいように、銀の糸が互いの唇をつなげ、弾けた。

キスの余韻に呆けていると、先輩の手が太股の内側を撫でる。皮膚の薄いところに指圧がかかり、ビクツと腰が跳ねた。

「触られるの期待してる？」

そう言って、先輩がおまんこに息を吹きかける。

「んああッ…ほしい…♡♡」

「そっかあ。でも、いつもみたいにしてあげたら、ただのご褒美になっちゃうなあ」

「や、やだああ…」

おまんこが疼いて、膣口がヒクヒクと挿入を求めている。こうなったら、自分の意志では鎮められない。こんな体により変えたのは先輩なのに、意地悪しないでほしい。

「せ、せんぱい…ッ」

「はいはい。ほんと、堪え性がないね。わかったよ。でも、触ってほしい時はなんて言うの？」

まるで子どもを躾けるような口調で、先輩が尋ねてくるので、余計に羞恥心がこみ上げてくる。

「わ、わたしの、変態雑魚まんこ、拓海先輩の舌でいっぱいじめて、ください…♡」

「よくできました♡ じゃあ、この勃起クリいっぱい吸って、クリフェラし

てあげるね♡」

先輩が肉芽を覆う包皮を広げると、ぷっくりと勃起した突起が外気に晒される。刺激を求めてふるふると震えるそこに、舌先が当たった。

「ああッ…♡」

そのまま、いきなり勃起クリを舐められ、腰がのけ反った。

「ッああああアア~~~~ッ!♡♡♡うあ♡んな♡っや、やあ♡んああ♡♡♡」

神経に直結したそこを、濡れる舌で何度も擦られると、ビリビリとした快感が下腹部から全身に伝播していく。

快感に腰をくねらせるたびにローターが動いて、膣内からも刺激を与えられる。

ちろちろ♡ちゅちゅ♡ちろちろ♡ちゅちゅ♡ちゅぴちゅぽ♡ちろちろ♡ちゅちゅ♡ちろちろ♡ちゅちゅ♡ちゅぴちゅぽ♡

「アああああアゝゝッ!♡♡♡っああ♡んん♡うあ♡うああッ♡♡やあああッ♡♡やだあ♡んああッゝゝっあ♡きもち、きもちいいッ♡ッだめ♡うああ♡♡やああアああ♡」

絶え間のないクリトリスへの刺激に、腰が何度も跳ねると、腰をがっしりと捕まれ、固定されてしまう。動けなくなったことで、快感を逃がせなくなり、強い刺激がクリトリスを襲う。

れろれろ♡れろれろ♡ちろちろ♡ちろちろ♡ちゅちゅ♡ちゅぴちゅぽ♡ちろちろ♡ちゅちゅ♡ちろちろ♡ちゅちゅ♡ちゅぴちゅぽ♡ちゅちゅ♡ちゅぴちゅぽ♡



「やあああ…ツツ♡♡だめ、え♡♡ッああんあッ♡や、んあ♡やだあ♡♡や、あ♡そこッ♡だめッ♡くりとりす、だめええ♡♡やだああ♡♡」

「勃起クリ、ぴんっと勃ってる♡ ぽってりと腫れて、ますます俺好みの可愛いクリちんぽになってるよ♡ ローター入りおまんこもくぱくぱしながら、おまんこ汁垂れ流してる。ふっ、この溢れたまん汁を指ですくって、クリちんぽにこうやってコシコシって塗りつけて上げようね♡」

ねっとりとしたまん汁を指の腹で掬い取り、今にも爆ぜそうなクリちんぽに垂らされ、馴染むまで擦られる。

まるで、本当のおちんちんをシコシコするみたいに、指で挟まれて、下品な喘ぎが止められない。

「おおーッッ！！♡♡アああッ♡、やああ♡っああ♡、いやだアああッ♡♡クリシコだめえええーッ♡♡やああ♡だめ♡クリシコ、おがじくなりゆう♡♡」

「駄目じゃなくて気持ちいいでしょ？ しこしこ♡しこしこ♡ もっと下品な喘ぎ声聞かせてよ♡ ほら、言ってごらん。勃起クリちんぽ、おちんちんみたいにシコシコされて、まん汁止まらない変態ですって♡ 上手に言えたら、ご褒美あげる♡」

ご褒美という言葉に口が自然と開く。先輩に開発された体では、こんな命令ですら、砂糖菓子のような甘美な悦楽を与えてくれる。

「勃起、クリちんぽ♡ああ、んあッ：おちんちんみたいに、シコシコ♡されて♡おまんこ、汁とまらない、ッあ、うああッ♡ 変態で、ごめんなしゃ

いッ!♡♡♡」

クリちんぽを弄る指が緩まないの、下品な喘ぎ声が抑えられない。みつともない声で、羞恥的な言葉を吐く自分に堪らなく興奮してしまう。

「上手上手♡じゃあ、ご褒美にローターの振動最大にしてあげる♡」

先輩はポケットから小さなリモコンを取り出すと、上向き矢印がついたボタンを長押しする。

「あ、や、まっ……んああ、あっああアああアあゝッッ!♡♡♡♡」

一気にローターの震えが強くなり、おまんこの中から振動音が漏れてくる。

「ッやああ♡だめ、え♡ッああ♡いっちゃッ♡♡いっちゃうからああゝッ!

♡♡も、やだアああ♡♡♡ローター、とめてええ♡♡やだああゝッッ!♡♡♡」

「いい声♡でも、だめだよ、おまんこにばかり気を取られてたら。こっちもクリシコ再開するよ♡はい、しこしこ♡しこしこ♡」

ごつごつと容赦なく膣壁を押しやるローターに合わせて、先輩は素早くクリちんぽをしごく。

予想できない突飛な動きで膣壁を押し上げるローターと、むき出しの性感帯をダイレクトに刺激する指。

二か所を攻める強烈な愛撫に、体が跳ねて、拘束具がガチャガチャと音を立てる。

「んあああゝッッ！♡♡♡やっ♡んあ♡あ、んんう♡とめ、とめてええ♡いっちゃ、いっちゃうからああ、あゝアあ！♡♡♡やだあああ！♡♡♡」

「だめだよ…」

突然、指の動きが止まる。そして、次の瞬間にはおまんこの中を蠢いていたローターも引き抜かれてしまった。

「ッああアッ…!？♡♡ な、なんでえ…?」

もうちょつとでイけるのに…。

恨めしくて、思わず先輩を睨んでしまう。

「だめだよ。忘れたの？ これはお仕置きなんだから、勝手に気持ちよくなったらダメだろ？」

「でも…」

「俺の言いつけ守れない悪い子は、一時間クリイキ我慢しようね」

「な、なんでえ！」

もう、あと数秒でイってしまいそうだったのに、一時間なんてとても耐え

られない。

「雑魚まんこを調教するためだよ。いい、一時間クリイキ我慢できるまで、おまんこにおちんちん挿れてあげないから」

「い、いやあ…」

「なら、一時間我慢すればいい。もちろん、その間、ずっとクリは可愛がってあげるからね♡」

「む、むりい…」

「さ、よわよわ雑魚まんこ、立派なおまんこになれるよう頑張ろうね♡」

悪魔の微笑みに、背筋が凍る。これから待ち受ける快樂地獄に怯える私をよそに、先輩は寸止めをくらっていたクリトリスをべろっと舐めた。

「はい、じゃあ、スタート♡」